

コリアンエスニック教会と米国の韓国系移民者

春木 育美

キーワード：エスニック教会、韓国系移民者、エスニック・アイデンティティ
Ethnic Churches, Korean Immigrants, Ethnic Identity

1. はじめに

2010年現在、米国には約171万人の韓国系移民者が居住しており、全米人口の0.6%を占めている。この数は、日系人の130万人(0.4%)を上回り、アジア系では中国系、フィリピン系、インド系、ベトナム系に次ぐ(U.S. Census Bureau 2010)。

韓国人の米国移民が本格化したのは、1965年に米移民法が改正された後の1960年代後半のことである。1970年代後半から80年代が米国移民のピークであり、80年代には毎年3万人前後の新規移民者が渡米している。90年代に入ると民主化の進展や経済発展、北朝鮮との緊張緩和などから、米国への移民は減少に転じた。しかし、1997年の通貨危機を受けて韓国経済が未曾有の不況に陥り、企業の倒産やリストラ、失業率の急上昇が続くと、米国への移民は再び増加した。2000年以降は子どもの教育問題を理由とした移民も急増している。

米国への本格的な移民の歴史が比較的に短いため、1965年以降の韓国系移民者に関する研究の多くは、移民1世の経済活動や生活誌、移民2世の教育やアイデンティティの問題に集中している(例えば、Min 1988; Yoon 1997; Park 1997; Hurh 1998; Moon 1999; Zia 2000; イ 2003; Kibria 2003; ユン 2004; チャン 2004; ナ 2004; Lew 2006; キムほか 2006; ミン 2008; Lee 2009; イ 2011; Kim 2013; Wu 2013など)。

在米韓国系移民者の約70～75%は、米国内のコリアンエスニック教会(以下、エスニック教会)に通っているとされるが(Kwon 1997; ナ 2004; イ 2008)、エスニック教会に関する研究の蓄積は浅く、先行研究の多くは、エスニック教会が移民者の経済活動や社会的威信の獲得に果たす役割、移民2世と教会の関わりなどに焦点を当てたものである(例えば、Min 1992; Kim and Kim 2001; Chai 2001; ナ 2004; イ 2008など)。そのため、こうしたエスニック教会が有する資源や提供するサービスが、なぜ韓国系移民者にとってそれほど重

要であるのか、どうしてエスニック教会でなければならないのか、といった点については必ずしも明確になっていないⁱ。

UPCUSA (The United Presbyterian Church in the USA) が行った韓国系 (Koreans)、アフリカ系 (African Americans)、ヒスパニック系 (Hispanics) の長老教会派の信徒 (Presbyterian) を対象としたパネル調査 (1988年) によれば、米国内のエスニック教会に所属する韓国系の信徒は、日曜礼拝に毎週出席する者 (78%)、日曜日に教会の活動に費やす時間 (6時間以上が54%)、献金額 (年に2000ドル以上が62%) が、アフリカ系やヒスパニック系に比べて極めて高いという特徴がみられた (Kim and Kim 2001:82-83)ⁱⁱ。

米国の中でも韓国系移民者は、とりわけエスニック教会の活動に熱心でコミットメントが強いエスニック集団である。エスニック教会は、米国への移民が本格的に始まった60年代後半から現在に至るまで、韓国系コミュニティの中核を成している。

韓国外交通商部の集計によれば、2002年7月現在、米国内で活動している韓国系のエスニック団体は、1015に上る。もっとも多いのは、同窓会 (682)ⁱⁱⁱである。続いて、山岳会、テニス会、テコンド協会などの体育団体 (497)、商人連合会、飲食業連合会や理容・美容師連合会などの経済・職能団体 (402)、YMCA、女性センター、福祉協会などの社会奉仕団体 (334)、合唱団、文化協会などの文化芸術団体 (232)、韓人会 (192)、出身地域ごとの郷友会 (107)^{iv}、ベトナム参戦戦友会、海兵隊、ROTCなどの在郷軍人団体 (89) の順となっている (外交通商部『在外同胞団体組織現況』2002)。

米国内にこれほど多数の韓国系団体が結成されている理由について、ナ・ヒョンオク (2004) は、韓国系移民者の多くは家族の労働力をフルに活用して零細なスモールビジネスを営んでいるが、こうした家族中心の労働・生活パターンが他のエスニックや人種との軋轢を引き起こす要因となるため、韓国系移民者は各種の団体を結成して団結することでこれに対応しようとしているのだと指摘している (ナ 2004:365)。

しかし、「在米韓人団体に対する意識調査 (2005)」^vによれば、こうした韓国系団体に1つでも加入している者は16.3%にすぎなかった。韓国系移民者の約7割がエスニック教会に通っているのとは対照的に、韓国系団体への加入率は低調である。これはどうしてなのだろうか。

本稿の関心は、韓国系移民者にとって、なぜ他の韓国系団体ではなく、エスニック教会が重要なのかという点にある。エスニック教会が米国の韓国系移民者の生活の中心に位置しているのは、どのような機能を持つがゆえなのであろうか。

こうした問題関心を明らかにするために、第一に、エスニック教会は韓国系移民者に対し何を提供しているのか、エスニック教会が果たしている社会的機能に注目し、韓国系移民者は教会に何を求め、教会の持つどのような資源が移民者のニーズに答えているのかを考察す

る。

第二に、事例研究として韓国系移民者が集住するバージニア州で最も有名な大型教会であるヨルリンムン長老教会をとりあげ、実際にエスニック教会が移民者の生活にどのような形で関わっているのか。また、エスニック教会は持続的発展のためにどのような取り組みを行っているのか考察する。

分析にあたり、2013年8月から2014年3月にかけて、ヨルリンムン長老教会への参与観察、およびバージニア州およびメリーランド州に在住する韓国系移民者17人へのインタビュー調査を行った。具体的な対象者は、表1に示す17人である。

調査方法は、電話またはメールで面接を依頼する方法や、インフォーマントに紹介を依頼するスノーボールサンプリング方法を用いた。インタビューは、バージニア州およびメリーランド州内のオフィスや飲食店などで、1回につき2時間程度行った。

表1 インタビュー対象者の属性

名前	性別	年齢	職業	在米歴
Aさん	女性	50代	食堂経営者	20年
Bさん	男性	20代	従業員	18年
Cさん	男性	40代	研究者	5年
Dさん	男性	30代	医師	3年
Eさん	男性	60代	自営業（通信販売）	24年
Fさん	女性	50代	自営業（クリーニング店）	33年
Gさん	女性	30代	事務職	7年
Hさん	女性	40代	福祉団体職員	10年
Iさん	男性	30代	会計士	25年
Jさん	男性	60代	建設業者	40年
Kさん	女性	50代	清掃業者	17年
Lさん	男性	30代	研究者	2年
Mさん	女性	20代	従業員	18年
Nさん	男性	40代	牧師	7年
Oさん	男性	50代	貸しビル／不動産業者	38年
Pさん	女性	30代	事務職	17年
Qさん	女性	50代	無職（主婦）	36年

2. 韓国系エスニック教会の活動と機能

韓国系移民者にキリスト教信者が多い理由は、渡米前に既にクリスチャンであった者が米国に移民にきたからだという説明がなされることが多い（例えばKim and Kim 2001:73）。

大部分の韓国系移民者は、大都市圏に居住していた中産層であり、韓国ではこの層にキリスト教信者が多い。しかし、韓国でキリスト教信者が占める比率は25%であるのに対し、在米韓国系移民者の比率は70～75%となっている。韓国系移民者がエスニック教会に通う比率は、他のエスニックに比べても著しく高い。その理由は何か。

韓国系移民者がエスニック教会に通う理由には、宗教的動機と社会的な動機の両方がある (Kim and Kim 2001:73)。移民前にキリスト教信者であったものは心の拠り所を求めてエスニック教会に通うが、信者ではなかった者がエスニック教会に引き付けられる要因は、後述するように、エスニック教会の信徒になることにより得られる便益がそこにあるからである。

2013年現在、米国には韓国系だけでも4275のエスニック教会がある。(『Christian Today』2013年1月15日)。中には、信徒数が1万人を超える超大型教会も複数ある。年度により多少の増減はあるものの、韓国系移民者300～400人につき1ヶ所の割合でエスニック教会がある (Hurh and Kim 1990; Kwon 1997)。なぜこんなにも多くのエスニック教会が存在するのであろうか。

キリスト教徒が国民の約25%を占める韓国では、もともと牧師の数が多く、海外での布教活動にも熱心である。キリスト教国である米国では、他地域に比べて移民教会が比較的容易に設立できると考えられている^{vi}。エスニック教会の牧師には、信徒から請われて渡米した招聘牧師、米国内の中・大規模エスニック教会に奉職した後に独立した牧師、「開拓教会」を夢見て渡米し、一から教会を立ち上げた牧師らがいる。米国内に多くのエスニック教会が存在していることは、韓国系移民者のニーズにあった包括的な宗教的・社会サービスを提供できなければ、信徒獲得競争に勝てないことを示唆している。

具体的に、エスニック教会が韓国系移民者に対し提供する社会的機能は何か。また、なぜ教会がそうした資源を提供する場となっているのか。

第一に、移民生活に必要な情報やセーフティネットを提供する互扶助機能が挙げられる。韓国系移民者はエスニック教会やエスニックメディアを通じて必要な情報を得ているが、中には、渡米前に教会とコンタクトをとり、地域の治安や学区の評判、家賃相場などの生活情報を入手し、住居の用意や空港への出迎えといったサービスを受けて移住する者もいる。

渡米後は、子どもの入学手続きからはじまり、水道・ガス・電気・電話など、生活上の各種手続きや、家具などの生活必需品を揃えるためのサポートを受けたりする。通院や交通事故、裁判や税金などに関するトラブルなどが生じたときは、必要に応じて通訳をしたり、専門知識を持った信徒が交渉の手助けをしたりするといった支援がなされることもある。

「80年代初めに家族で移民に来たが、開業したクリーニング店が軌道になるまで、極貧

生活だった。そんな時、今も通っている教会の牧師が、週末になるといつも米やラーメンをたくさん抱えて、わざわざ我が家まで持ってきてくれた。病気になると、お見舞いに来て祈祷をしてくれた。どんなに救われたことか。」(Fさん)

韓国系移民者は、スモールビジネスに従事する者が多く、起業する前に同じ信徒が運営する店舗でビジネスのノウハウを学んでから独立開業するケースもよくみられる (イ・ジョン 2008:577)。教会の信徒間で情報交換やビジネス・スキルの伝授、店舗の取引や売買などの商談、事業資金調達のための一種の頼母子講である「契 (rotating credit clubs)」が行われることもある。新規事業を始めたり、店舗を開いたりした際は、エスニック教会の週報に掲載を依頼し、宣伝することも可能である。

教会によっては、信徒の住所や電話番号、メールアドレスなどを編纂した「教会要覧」を毎年発行しており、信徒の中にはここに自分の事業や店舗などの広告の掲載を依頼する者もいる。物品調達、修繕、医療、税務、法律相談など、生活上の必要が生じた時に、こうした「教会要覧」は役に立つ。また、労働力が必要な時には牧師に依頼して、適切な人材を紹介してもらうこともある (Park 1997:187)。ひとりで解決できないような事態に陥った時にまず相談するのも、教会の牧師やメンバーであることが多い。

「ある信徒が困っているのだから、助けてやってくれと、と牧師から直接頼まれると、何かしないではいられない。以前、重病になった無保険の信徒がいたが、みんなで協力して通院や治療費のサポートをしてあげた。教会は損得勘定抜きで付き合いができる唯一の場だ。何か問題を起こした人は、教会にいられなくなるし、韓国系コミュニティですぐ噂が広がり、信用をなくす。同じ韓国人だからといって信頼できるわけでは決してない。一番裏切られることがなきそうなのが教会の人間関係だと思う。」(Cさん)

失業時や、転職時にも、有用な情報が同じエスニック教会の信徒からもたらされることがある。

「1998年に家族で移民に来たが、3年後に夫と離婚して母子家庭となった。生活のために仕事を探し、同じ教会の信徒から韓国系スーパーのレジの仕事を紹介され働いてきたが、店舗の閉鎖に伴い、失業した。教会で新しい仕事先の情報を求めたら、ほどなくしてアメリカ国立衛生研究所で働いている信徒が、清掃員の仕事を斡旋してくれた。本当に助かった。」(Kさん)

このようにエスニック教会は、韓国系移民者にとって、米国社会で生きていくために必要な情報が容易に得られる上、無償で援助の手を差し伸べてくれる存在であると認識されている。

第二に、信仰とそれに基づく「疑似親族集団」形成のモメントを提供する機能である。

家族単位の移民とはいえ韓国系移民者の多くは核家族であり、故国の親族集団との日常的な関係性から切り離され、頼れるものは自分の家族だけという中で移民生活を送っている。エスニック教会は、日曜礼拝などを通じて韓国系移民者が頻繁に顔を合わす場を提供しており、信徒をよく知る牧師には、会員間の信頼を担保する役割が期待されている。

移民者は教会に通うことで、親族を代替する親密圏やセーフティネットをエスニック教会に見いだそうとする。

「一番つらいのは、親、兄弟姉妹、おじ、おば、いとも誰もいないこと。親族というセーフティネットがない。孤独な子育てもつらい。親しか頼れる大人がいない子どもたちも可哀想。何かの時に一番頼みやすいのは、利害関係が絡まない教会の人たち。病気の時には真っ先に来て助けてくれるだろう。」(Aさん)

「移民生活では、同じ韓国系だからといって、気の合う信頼できる親友なんてなかなかできない。教会にはいろいろな年齢の人がいて、教会の勧士や年上の女性はイモ（母方の姉妹）や姉のように、親身に接してくれるから、見栄を張る必要もないし、安心して悩みを相談できる。」(Gさん)

「うちは自営業（クリーニング店）で、朝から晩まで黙々と働いているから、夫や子供以外の人と会って話ができるのは、日曜日の教会だけ。これがなかったら孤独で不安で死んでいたと思う。」(Fさん)

移民者は近隣にある評判の良いエスニック教会を調べて、日曜日の礼拝に参加する。信徒として登録が済むと、「新しい家族」になった者として教会メンバーに紹介され、歓迎の食事会や小グループへの加入などを通じて親交を深めていく。

エスニック教会では、週末や平日の夜に信者の家で、聖書勉強会や祈祷会などの集まりを持つことを奨励しており、区域を分けて小グループを編成し、家族ぐるみの交際ができるように制度化しているところが多い。家が狭い場合には、教会の集会所や歓談室、レストランなどを利用することもある。茶菓子の時もあるが、夕食を持ち寄り会食することもある。

小グループの形成は、居住地域や家族構成を考慮して決められ、数年ごとにメンバーを変

えることもある。グループ長には、信仰心が厚く、教会での奉仕歴が長い人物が指名されることが多く、各メンバーの信仰心を深めるための役割も期待されている。実際に、こうした小グループでの集まりを重ねていくことで、親交を深め、疑似親族のような関係へと発展することが少なくないという。

家族を故国に残して単身渡米した移民者が、教会のメンバーに疑似親族集団としての役割を期待するのは、第一に、彼らは毎週の日曜礼拝や小グループ活動を通じて最も頻繁に対面接触が可能な人々であること。第二に、信仰に基づく利他的な相互扶助が奨励されている場で関係を取り結んでいること。第三に、教会には男性、女性、父親、母親、シニア、未成年者であれば年齢別のグループなど、家族成員それぞれが参加できる同質的な親密圏が形成されているからである。

移民1.5世や2世にとっても教会は、同じエスニックの同世代の子どもたちと持続的な関係を築ける場所である。親たちが韓国語で行われる礼拝後に、歓談や各種の勉強会、ボランティア活動などを行っている間、子どもたちは年齢別の礼拝、日曜学校、韓国語クラス、聖歌隊、バンド、バイブルスタディ、ボランティア、宣教会などの小グループ活動などに参加する。夏休みになると、エスニック教会が開催するサマースクールやキャンプなどに参加し、より多くの時間を教会内や教会の友人と過ごすことになる。米国では居住区によって学校の人種構成が大きく異なるが、教会に所属することで、子どもたちは有形無形のピア・サポート受けることができる。

「週末はいつも教会で、平日の夜も教会のユースグループで集まってコンサートの練習をしたりして、すべての生活が教会中心に回っていた。学校で他の人種の同級生たちがよく行くサマーキャンプやスポーツクラブも、一度も行ったことがない。日曜日はいつも教会だったから、学校の子よりも教会の子の方がはるかに長い付き合いで、従兄弟みたいな感じ。うちの母は、ここから結婚相手を見つけなさいとか言っているけど。」(Mさん)

「小さい時から家族ぐるみで一緒に親しく付き合っていたのは、教会の子。教会の子と集まると言えば外出させてくれるし、教会になら夜遅くまでいさせてもらえるから、話こんだり、つるんで遊びに行ったり、ちょっと悪さするのも、いつも教会の仲間たちと。」(Bさん)

第三に、韓国系としてのアイデンティティを維持、継承する機能である。

エスニック教会は主に、韓国で生まれ育った1世、韓国で出生し未成年の時に家族で移民

にきた1.5世、米国内で生まれ育った2世で構成されている

通常、エスニック教会では1.5世や2世向けに、韓国語や韓国の伝統文化を伝承するための「韓国(人)学校」が開設されており、韓国語教室だけでなく、韓国の歴史、童謡や古典舞踊、礼儀作法や礼節などを教える文化講座や、韓国の年中行事を楽しむイベントなどが多数用意されている。

エスニック教会は、移民の子弟のために格安な教育システムを提供し、韓国系としてのアイデンティティを付与する場となっており、韓国文化を維持・継承する中心機能を果たしているといえる。とりわけ米国生まれの2世は、教会コミュニティに所属し、同世代のピア集団と深いつながりが形成することで他のエスニックとの境界を意識し、韓国系としてのアイデンティティを確立していく。

10代になるとエスニック教会のピア集団とのサポーターネットワークの重要性はより強まり、その中で自己のアイデンティティ・クライシスを乗り越えていく^{vii}。

大半のエスニック教会では、信仰生活や組織体系、説教のスタイルなど、本国の教会のやり方が踏襲されている。また、礼拝では韓国のさまざまな伝統的価値観が聖書の言葉と重なる点がくり返し説かれるなど、祈祷や説教を通じて、韓国の伝統や思想、価値観が強調されることが多い(イ 2003:340; イ 2008:577)。

1世は韓国語で、2世は英語で行われる礼拝に出席するのが通常であるが、韓国語の礼拝では、一般的に米国内のイシューではなく、韓国の政治経済問題や南北統一、北朝鮮の人権問題などに関する説教が多く、韓国で災害が起きたり事件があった時には、韓国社会のために祈祷する(ミン 1991; Kim 2004; イ 2008)。

時には、米国内の韓国系団体の政治的運動と連動した説教がなされたりすることもある。

「うちの教会では、牧師が「東海」併記運動^{viii}に積極的で、米国の社会科の教科書に日本海と東海を併記する法案を通過させるために助力してほしいと訴えていた。子どもの時に移民に来て、それ以来一度も韓国には行ったことがないけど、とても重要な問題だと思ってすぐさま募金して、活動のためのボランティア登録もしたわ。」(Qさん)

こうした牧師の意向や説教の内容によっては、韓国系としてのアイデンティティの確認だけでなく、祖国への忠誠心や出身国への一体感を呼び起こす「遠距離ナショナリズム」(Basch et al., 1994:7)を生じさせることもある。移民者と祖国の間に交流や同一化の場をつくり出すトランスナショナルな社会的実践と政治の場(Vertovec, 2009=2014:86)を、エスニック教会がもたらすこともあるのである。

このようにエスニック教会は多様な機能を持ち、それぞれの家族成員のニーズに応えるも

のとなっている。他の韓国系団体と比較してみると、「学縁」にもとづく同窓会や、「地縁」に基づく郷友会は、在米韓国系移民社会においては、限られた人数での閉鎖的な組織になりがちである。そのためこうした団体では、年齢による序列意識や社会経済的階層の違いが先鋭化されやすく、それがこうした団体への加入を忌避させる一因となっていると考えられる。

「1991年に移民に来て、大学や高校の同窓会に行ってみたが、限られた人数で期数や年齢、移民時期もバラバラなものだから、歪んだ序列関係ができていて、上下関係が面倒で足が遠のいた」(Eさん)

「郷友会に入ると、韓国から道知事や議員が視察に来たから歓迎会に來いと、やれ故郷で災害が起きたから募金活動しようとか、社会的地位があつて資産家ならいいけど、お金も出てくし、働きづめで余裕も時間もないから、だんだん行かなくなった」(Jさん)

韓国系移民者が多く居住する各州に複数結成されている韓人会の場合はどうであろうか。韓人会は、韓国から大統領が訪米した際には、韓国系移民社会の代表として歓迎会を主催し、近年は慰安婦問題や、前述した「東海」併記運動などの政治的ロビー活動に関与することも多い。韓人会についても、権力志向の強い成功者の集まりであり、自分たちとは関係のない団体であるとみなす移民者は少なくない。

そもそも韓人会とは、どのような活動をしているのか。バージニア州で歴史が最も長い「バージニア韓人会」を例にとると、会長は韓国系移民者による選挙で選出され、副会長、理事、各種委員会委員長などを含む30人の幹部で構成されている。一般会員はおらず、韓人会の事業・運営費は、幹部のみが払う会費や個人の資金、寄付金、各種のグラントなどから捻出されている。韓国語教室や職業訓練、就業フェア、旧正月や光復節といった韓国の祝祭日合わせた各種のイベント、有権者登録サポートなど多様な事業を展開しているが、韓人会は、韓国移民者にとっては必ずしも近しい存在ではない。

「韓人会は、成功した人たち、名望家の集まりでしょう。政治的な団体だし。韓国系コミュニティのために何をしているのかよくわからないし、正直関心もないわ。」(Aさん)

韓国系移民者は一枚岩ではない。その属性は多様であり、職業、所得、教育経験、英語運用能力、法的資格などにより階層化されており、活用できる経済的、政治的、社会的資源へのアクセスには格差が存在している。そうした韓国系移民者に多種多様な生活資源へのアクセスを提供するのが、エスニック教会である。

また、エスニック教会は、移民者個々人の属性に関係なく、同じ信徒として、無条件に存在を承認される場ともなっている。

「黒人と国際結婚した私でも、米兵と結婚した女性でも、偏見や差別意識なく受け入れてくれるのは、教会だけ。何びとであっても差別されない、してはいけない、できないという雰囲気が教会にはあるし、そうあるべきだから。」(Gさん)

「教会の信徒の職業や学歴、階層は本当にさまざまだし、母子で来ているキログ^{ix}もいる。中には不法滞在している人もいる。みんなわかっているけど、教会では、神の前ではみな平等という教えに従い、あえて聞かないし、知らないふりをする。それが暗黙の了解となっている。信仰心を持って信徒同士で助け合う、それがクリスチャンとしての正しいあり方でしょう。」(Cさん)

韓国系移民者による生活面や心理面での教会に対する依存度の高さは、まさにこの点にあるといえる。エスニック教会は、「同窓会」「職業別団体」、「文化・体育団体」や「韓人会」とは異なり、性別や年齢、属性に関係なく家族全員が所属することができ、それぞれに便宜がもたらされる唯一の組織となっているといっても過言ではない。

3. 事例研究「ヨルリンムン長老教会」

(1) ヨルリンムン長老教会の概要

次に、バージニア州ハンドンを位置するヨルリンムン（開かれた門）長老教会を事例として、実際にエスニック教会が移民者の生活にどのような形で関わっており、また、教会の持続的発展のためにどのような取り組みを行っているのかを考察する。

バージニア州には209の韓国人系教会がある^x。その中でもヨルリンムン長老教会は、信徒数が3千人を超える、地元でも有名な大型教会である。

ヨルリンムン長老教会の前身は、1984年1月に設立された「韓人伝統長老教会」である。当初は信徒数が少なかったため、担任牧師は毎日のように空港に出向き、到着したばかりの韓国系移民者に声をかけて教会に誘い、場合によっては住む場所や職場まで斡旋し、新規の移民者が米国生活になじめるよう定着を支援した。信徒には週に数回、安否を電話で尋ね、信徒たちの家を訪ね歩いて祈祷し、経済的に苦しい信者がいれば米やラーメンなどの食糧を家まで届けたという。

2001年に現在の敷地であるバージニア州ハンドンに教会を移転するとともに、教会名を

「韓人伝統長老教会」から「ヨルリンムン長老教会」に変更した。教会が建てられている広大な敷地には、韓国語礼拝を行う地上2階、地下1階の建物と、英語礼拝を行う地上2階建ての建物の2つがある。2015年7月現在、元老牧師1人、担任牧師1人、牧師16人、英語礼拝を行う牧師3人、役職者として、元老長老12人、中堅長老15人、使役長老2人、視務長老17人が在籍していた。教会内には、信仰生活、育児、教育、青少年問題、家族問題などに関する各種の相談窓口が設けられており、それぞれの担当牧師が直接、相談を受け付けている。

日曜礼拝は、韓国語と英語の礼拝がそれぞれ3回ずつあり、毎回約3千人が参加している^{xi}。礼拝後に、昼食や茶菓子が提供されるが、昼食は牧師夫人やボランティアの信徒が調理した韓国の家庭料理である。旧正月や秋夕（旧盆）といった「名節」時には、伝統的な供物料理がふるまわれる。「食」は韓国文化の中できわめて重要な意味を持つため「韓国料理」の提供自体が、韓国文化の保持と継承につながると考えられている（Kim 2004:32）。

礼拝とは別に、聖書の勉強や、韓国語と韓国の文化、歴史などを学ぶ日曜学校が、2-3歳、3-6歳、小学1-3年、小学4-6年、中学～高校生と、年齢別に12クラス開講されている。

その他にも、中学生と高校生に分かれたユースグループの活動が毎週金曜日の夜にあり、バンド演奏会やダンス、劇などの定期公演に向けた練習や準備のために集まっている。後述するように、教会に通う、とりわけヨルリンムン教会のような規模の大きな教会に通う10代の2世たちの生活は、教会を中心に回っているといても過言ではない。

このほかに、定期的に運動会やピクニック、親子キャンプ、ユースキャンプ、テニス大会、ファミリーコンサートなどが開催され、信徒間の親睦を深める場が設けられている。

教会の信徒になるには、まず、メールで出席したい礼拝の日時を連絡する。当日は、勸士が受付で待っており、礼拝場内の特等席に案内される。礼拝後には別室で茶菓子のもてなしがあり、長老による教会の説明や質疑応答の時間が設けられる。その後、カフェテリアに移動し、役職者や居住地が近い信徒たちに紹介される。そこで彼らと昼食やコーヒーなどを食しながら歓談の時間を持つ。

数日経つと勸士から電話があり、次回の礼拝の知らせや、相談事がないかなど聞かれる。同時に、牧師と長老からそれぞれ、安否を尋ねる丁寧な手紙が届く。

正式に信徒として登録が完了すると、牧師主催の歓迎夕食会に招待され、名前や顔写真が週報や月報に掲載される。紹介者がいる場合は、紹介者の名前も記載される。

このようにヨルリンムン長老教会では、豊富な人的資源を活用して新しい信者を教会へ迎え入れる手順がシステム化されており、毎月約30～40人の移民者が新たな信徒として登録されている。

(2) ヨルリムン長老教会の取り組み

信者数の多い大型のエスニック教会であるヨルリムン長老教会が、信者数を維持し、持続的な発展を遂げるために行っている取り組みとして注目されるのは、障がい（自閉症、脳性麻痺、ダウン症など）を持つ子どもがいる家庭や、低所得層や不法滞在者、ひとり親家庭をターゲットにした手厚い社会福祉サービスである。

ヨルリムン長老教会では、障がいを持つ子どものみを対象とした日曜学校や、養育クラスを別途開設している。乳幼児がいても親が礼拝に参加できるよう、預かり保育や日曜学校を開設している教会は少なくないが、障がいを持つ子どものための専用のスペースを設け、専従スタッフを配置して日曜学校や養育サポートを行っている教会は多くない。ヨルリムン長老教会では、障がいを持つ子どもとその家庭に希望を与え、信仰へと導くことを重要なミッションの一つとして取り組んでおり、障がい児クラス担当の牧師と、専門知識を持つスタッフやボランティアを多数配置している^{xii}。

信徒数が3,000人を超える大型教会ともなると、滞在資格や所得階層、家族構成が多様な信徒のニーズにきめ細かく対応することが難しくなる。こうした問題に対処すべく、ヨルリムン長老教会では、ワシントン韓人福祉センター（以下、韓人福祉センター）と提携し、医療や社会保険、生活保護、育児支援など、福祉制度全般に関わるサポートを一任している。

韓人福祉センターは、1974年に設立された非営利社会福祉団体で、英語と韓国語が堪能な18人の専従職員が働いている。職員の半数は社会福祉分野の修士号を取得しており、米国の福祉制度や医療制度のしくみを熟知した専門家が揃っている^{xiii}。

韓人福祉センターでは、失業や低所得など経済的困難にある人には、フードスタンプ（補助的栄養支援プログラム：SNAP）などの受給手続きのサポートを、疾病を抱えた無保険者や不法滞在者には、無料の診察や検査を行うメディカルセンターの紹介と予約の代行、診察時の通訳などを行っている。そのほか、ボランティアの韓国系医師による無料の人間ドックや乳がん検診、医療保険制度に関する相談、DV被害者サポート、アルコールや麻薬中毒に関するカウンセリング、高齢者のための無料の在宅ケアサービスやグループホームの建設など、さまざま業務を展開している^{xiv}。

ヨルリムン長老教会は、韓人福祉センターの最も大きなスポンサーの1つであり、教会とセンターは、強い互恵関係で結ばれている。ヨルリムン長老教会は毎月、一定額を支援金として韓人福祉センターに寄付しているほか、教会でのバザーやイベント開催時に、センターの運営資金を集めるための募金活動を行ったり、広報ブースを設けたりするなどの配慮をしている。

ヨルリムン長老教会の担当牧師から、福祉関連、医療保険などの相談が寄せられると、韓人福祉センターのスタッフはすぐさま対応に乗り出し、各信徒が抱える問題解決に向けた助

言や支援を行う。信徒の中には、不法滞在者、低所得者、医療保険など各種の社会保険未加入者もいるため、個人の事情がよくわかっている牧師と韓人福祉センタースタッフが連携して、支援活動を行っている。そのため、牧師と韓人福祉センターのスタッフは緊密に連絡を取り合っており、両者の間には、強い信頼関係が構築されている。

このように、障がい児を持つ家庭、低所得者や不法滞在者、ひとり親家庭など、韓国系移民コミュニティから排除されがちな人々を進んで包摂するのがエスニック教会の役割の1つであり、ヨルリンムン長老教会はそうした機能にとりわけ力を入れているといえる。

4. 韓国系エスニック教会の今後の課題

このように、エスニック教会が果たしている機能は多岐にわたり、韓国系移民者の拠り所としてこれからも存在しつづけることは疑いの余地がない。しかしながら、エスニック教会が共通して直面している課題がある。2世の教会離れである。

現在、在米韓国系コミュニティの中心は、移民1世から成人前に家族とともに渡米した1.5世へと移行している。しかし、韓国からの新規の移民流入が続いているため、常にニューカマーの1世が存在し、今のところ韓国語での礼拝のニーズは高い。

しかし、1970年代以降に渡米した1世や1.5世の子どもである2世のボリュームゾーンは年々厚くなっており、1世中心の教会では今後、信徒数の減少が予想されている。中でも深刻なのは、2世のエスニック教会離れである。

移民神学研究所が行った『北米韓人教会実態調査』（2012）によると、2世の場合、高校卒業後には9割が教会を去っていくという。成人した2世の多くは、親たちの世代の教会から独立した、自分たちだけの教会を持ちたがる（Kim, Warner and Kwon 2001:14）。英語が母語である2世がエスニック教会に通い続けるには、信仰心だけでなく、韓国系としての強いアイデンティティやエスニック・ネットワークの効用といった付加価値が必要となると思われる。

しかし、それ以上に求められるのは、移民1世に内面化され、エスニック教会内で温存されている「韓国的なもの」の刷新であろう。一般的に1世の信者が多い教会ほど、韓国の教会と同じスタイルの信仰生活や運営方式が好まれる傾向がある。そうした教会ほど、権威主義的で家父長的な雰囲気があり、そうした点にアメリカで生まれ育った2世は違和感を持つようになる（Kim and Kim 2001; Kim, Warner and Kwon 2001）。

こうした1世との文化的葛藤は、2世がエスニック教会を離れる要因として作用している。2世が教会を離れる理由として最も多いのは、親世代である1世の権威主義的な言動や、単一的な価値観に対する不満である（『Christian Today』2012年7月21日；2012年7月23日）。

「1世は、権威主義的で、強い命令口調で指示する。成人した2世に対して、それ相応の対応をしない。」(Iさん)

また、1世の親世代に内面化されている韓国的なものの考え方や価値観が、米国で生まれ育った2世とアイデンティティ・クラッシュを引き起こすこともある。

「アイデンティティの問題で悩んだ10代のうちは、同じ韓国系の友人といるのが心地よく (cozy)、支えになったけど、どの大学に進学するのか、どんな職業に就くのかについて、1世の親世代から干渉されたり、比較されたりする雰囲気は嫌で、教会から足が遠のいた。高校生の時まではよかったのだけど。」(Mさん)

「卒業後、就職がうまくいかず、親の経営する食堂を手伝っている。教会に行くと、大学まで出たのに、何でそんな仕事をしているのかと大人たちから聞かれるのが嫌で、行かなくなった。弁護士とか医者、科学者しか職業がないと思っている。成功の定義がみんな一緒に、息が詰まる。」(Bさん)

「うちの親は典型的な韓国人。教会の大人たちも韓国人そのもの (very Korean)。1世の教会は韓国世界で、あそこにいると価値観が狭まり、個性がなくなりそうになる。」(Pさん)

ヨルリンムン長老教会では、具体的にこうした問題に対処するため、どのような対応策をとっているのだろうか。

ヨルリンムン長老教会は、前述したように教会の名称を「韓人伝統長老教会」から変更しているが、これは2世を意識したものである。教会名から連想させる「韓人」以外や「長老教」以外は受け入れないという閉鎖的な姿勢では、今後、2世をつなぎとめることはできないという判断であった。2世が主流の教会になった時、韓人という名前がついていては、韓国系以外の友人を教会に連れてくるのが難しく、教会を存続させるためにも、誰にでも門戸を開き歓迎するというメッセージをこめて、ヨルリンムン長老教会 (Open Door Presbyterian Church) と改称したのである。

大半のエスニック教会では、韓国語礼拝のほかに、2世らを対象とした英語礼拝を行っているが、メインは韓国語の礼拝である。多くのエスニック教会では、成人した2世たちが教会を去っている。また、成人した2世が独立して自分たちだけの教会を建設しようとする動きも活発化している。

ヨルリンムン長老教会は、敷地内に英語礼拝を行う礼拝所が入った建物を別に建て、行政面でも独立性を維持できるように、別組織とした。教会の予算は献金や寄付金などを本部（韓国語圏）で管理し、運営資金は信徒者数に応じて配分している。ヨルリンムン長老教会全体の運営や方針に関する決定権も同様である。

2014年現在、信徒数全体に英語圏の信徒が占める比率は約25%となっている。ヨルリンムン長老教会に通う2世たちの場合は、日曜日に家族と教会に来て、同じ敷地内にある別棟の独立した空間で礼拝やグループ活動をするため、教会での昼食や会食時以外に1世の親世代と顔を合わせることはあまりない。

また、ヨルリンムン長老教会では、ラテンアメリカ系移民者を対象とした礼拝を、毎月第3土曜日の朝に行っている。礼拝後はラテンアメリカの伝統食をメニューにした朝食を提供し、帰り際には、果物や野菜、パンなどの食料、ベビー用おむつや韓国系の信者が寄贈した衣料などを配布する。礼拝には、2014年3月現在で約270人のラテンアメリカ系移民者が参加している。ラテンアメリカ系移民者は、韓国系が営むビジネスにおいて、身近な顧客であると同時に、被雇用者という位置づけにあり^{xv}、礼拝への参加をアプローチしやすいエスニックである。

ヨルリンムン長老教会が、ラテンアメリカ系移民者に照準を定めた活動をしている目的は、近年プロテスタントが急増しているラテンアメリカの出身者たちを新たな信者として開拓し、布教活動を行うためである。もう1つの目的は、英語礼拝を担当する牧師の意欲や定着率を高めるためである。英語礼拝を行う2世の牧師の多くは、韓国系以外の多様なエスニックの信徒を獲得することを目指しているからである。

また、教会の活動を支える2世の信徒の中にはスペイン語が堪能な者も少なくないが、ラテンアメリカ系移民の信徒へのサポートに関わることで、2世がエスニック教会での活動を維持する意義を見出せるようにするという目的もある^{xvi}。

ヨルリンムン長老教会ではこのように、2世の教会離れを食い止めるための方策を模索しているところである。

5. おわりに

韓国系移民者は信仰だけではなく、移民生活に適応し生活資源を確保するために必要な結びつきを求めて、エスニック教会に通っている。

在米韓国系移民者によるキリスト教信徒の多さやエスニック教会への依存率の高さは、エスニック教会が、他の韓国系団体とは比較にならないほど広範囲のサービスやエスニック資源を提供し、さまざまな社会的機能を果たしていることに要因がある。これらの機能は、韓

国系移民者の特徴と不可分のものであり、その特徴こそが教会の存続を可能にしているといえる。

韓国系移民者の特徴とは、第一に、韓国生まれの1世が主流を占めているという点である。移民者の78%は米国外で出生しており（Pew Research Center 2010）、移民の歴史が浅いため、韓国系コミュニティの中心は、1世および成人前に家族とともに渡米した1.5世となっている。また、韓国系移民者の81%の家庭内言語が韓国語であり（U.S. Census Bureau 2010）、韓国語礼拝を行うエスニック教会の存在意義が揺らぐことは当分ないであろう。

以前ほどではないにせよ、新規の移民流入が続く限り、米国内には常にニューカマーの1世が存在することになる。エスニック教会が提供する人的資源や「疑似親族」的な紐帯は、故国の親族ネットワークから切り離された生活を送る1世にとって大きな支えとなる。

第二に、大都市圏に集住する傾向が強い点である。韓国系の人口は全米に分散しておらず、特定の州や都市に集中している。ロサンゼルスやニューヨーク、シカゴやワシントン地域のコリアンタウンには、ハングルの看板を掲げた店舗が立ち並び、韓国系スーパー、飲食店、金融機関、不動産、薬局、美容院、浴用施設、学習塾、韓国系のための医療施設や老人ホームなど、あらゆる施設がそろい、韓国内とさほど変わらない生活ができる環境が整っている。こうした環境が新規の移民者を引き付けるプル要因となっている。

経済的に余裕がある層は、都市郊外の教育環境の良い地域、レベルが高いとされる学区域に移住するが、こうした特定の地域への集住により、エスニック教会もまた韓国系の多い地域に多く建てられるようになる。アクセス可能なエスニック教会が多数あるということは、自分のニーズに合った教会を選択できるということにつながる。また、エスニック教会側にとっても、新たな信徒獲得に成功すれば、比較的短期間に近辺から多くの韓国系移民者を集めることが可能になる。

第三に、単身よりも家族単位の移民が主流となっている点である。とりわけ2000年以降は子どもの教育問題を理由とした移民が増加しており、こうした家族移民の増加は、住環境、子どもの教育、アイデンティティの問題、貧困や無保険者の医療問題、親子間の文化的葛藤など、子どもに関わる懸案が生じやすいことを意味しており、それだけ家族単位のサポートの必要性が増大する。各家族成員のニーズに応える複数の機能を提供するのが、まさにエスニック教会である。

第四に、職業的にスモールビジネスの比率が、他のエスニックに比べて極めて高い点である。韓国系移民者の多くが、移民初期の段階では、同国人相手のエスニックビジネスで生計を立てるか、スーパー、青果店、クリーニング店、飲食店などのスモールビジネスを営んでいる。その際、同じエスニック間の人的ネットワークは、事業を成功させるために極めて重要な資源となりうる。こうした人的資源を獲得する上で、教会は最もアクセスが容易かつ有

用なコミュニティなのである。

しかし、米国で生まれ育ち、英語を母語とし、米国の教育を受けて育った2世にとっては、こうしたエスニック教会の持つ機能の有用度は相対的に低くなる。この先、成人した2世が家庭を持って3世が生まれはじめ、2世や3世の数が1世を上回るようになった時、エスニック教会は衰退に向かうのか、あるいはどのような変貌を遂げていくのか注目される。

注

- i 韓国では仏教徒の比率は約25%となっているが、米国では仏教徒の韓国系移民者は、キリスト教信徒に比べて極めて少ない。その理由については、(Kim, Warner and Kwon 2001) を参照されたい。
- ii アフリカ系とヒスパニック系では、日曜礼拝に毎週出席する者は、それぞれ34%、49%、日曜日に教会の活動に費やす時間(6時間以上)は、36%、39%、献金額(年に2000ドル以上)は、35%、26%であった。
- iii 高校や大学の同窓会団体では、親睦を深めるため、忘年会や新年会、ピクニック、ゴルフ大会、釣り大会などを行っている。「親睦契」という一種の頼母子講で資金を集め、奨学金を支給したり、子弟を韓国に送り韓国文化や伝統を学ばせたりしている団体もある。
- iv 郷友会では、旧正月やお盆などの年中行事に親睦会を開催しているが、ボランティア活動や政治活動に参加したり、故国に訪問団を派遣したりする団体もある。
- v 全南大学校社会科学研究院が、2005年に韓国系移民者251人を対象に行った調査。
- vi 韓国では教会の敷地を借用するのに、「チョンセ(保証金)」が必要とされる韓国独自の賃貸システムにより多額の費用がかかるが、アメリカではそうした負担が相対的に低く、月払いでどこでも始められる。また、教会の建物を礼拝のない時間帯には格安、または無償で貸してくれる教会も多いという(「duranno」<http://www.duranno.com/> 2014年2月4日アクセス)
- vii 多くの2世が、中学から高校生の際にエスニック教会で経験したユースグループ活動が、エスニック・アイデンティやエスニック・プライドの確立に最も大きな役割を果たしたと述べている。詳しくは(Cha 2001) を参照されたい。
- viii 2013年から2014年にかけてバージニア州議会で「東海」併記法案を可決させるために韓国系団体が展開したロビー活動を指す。「東海」併記法案は、バージニア州の公立学校の教科書に「日本海」と表記する際に韓国政府が主張する「東海(East Sea)」という呼称を併記するよう定めるもので、2014年に4月に成立した。Qさんの通う教会では、牧師がこのロビー活動を積極的に支援していた。詳しくは、(春木, 2015) を参照されたい。

- ix 「キロギ」家族を指す。「キロギ」家族とは、子どもを早期留学させるために、妻子を海外に送り、父親は韓国に残って稼ぎ、生活費や教育費を仕送りする別居状態にある家族のことを指す。小中高校生の早期留学制限が廃止された1999年以降に急激に増加したが、近年は減少傾向にある。
- x ワシントン中央日報編『ワシントン中央日報業所録』2012年、中央日報社。
- xi 一例として、2015年6月7日（日曜日）の礼拝参加者数は3,324人であり、献金額は14万4,405ドルであった（「ヨルリンムン教会週報」、2015年6月14日）。
- xii キム・ソンファン牧師へのインタビュー、2014年2月4日、バージニア州。
- xiii チョ・ジヨン事務局長へのインタビュー、2014年2月15日、バージニア州。
- xiv このほかにも、ボランティアによる法律相談や、資産管理、不動産、税金対策、融資に関する専門家によるセミナーの開催、職業訓練、シニア向けの文化講座、英会話教室、中高生のための放課後学習教室、ハローワークの運営、市民権申請書類の作成、翻訳、面接指導なども行っている。
- xv 多くの韓国系スーパーでは、ラテンアメリカの食材を販売しており、生鮮食品の値段も安いことから、アジア系だけでなくラテンアメリカの消費者も多い。また、こうした精肉や鮮魚、野菜などの生鮮食品の下処理をするのは、ラテンアメリカ出身の従業員である。スモールビジネスを営む場合でも、韓国系よりも賃金の安いラテンアメリカ系出身の移民者を雇用することが多く、現地の韓国語の新聞には「雇用者のためのスペイン語会話」が連載されている。
- xvi キム・ソンファン牧師へのインタビュー、2014年2月4日、バージニア州。

参考文献

英文献

- Basch, L., Schiller, N. G., Szanton Blanc, C., 1994, *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments and Deterritorialized Nation-States*, Routledge.
- Buechler, S. M., 2011, *Understanding Social Movements: Theories from the Classical Era to the Present*, Paradigm Publishers.
- Foner, N., 1997, "What is New About Transnationalism?", *Canadian Journal of Sociology* 6(3), pp.355-375.
- Cha, Peter T., 2001, "Ethnic Identity Formation and Participation in Immigrant Churches: Second-Generation Korean American Experience", In *Korean Americans and Their Religions: Pilgrims and Missionaries from a Different*, edited by Shore Kwang Chung Kim, R. Stephen Warner and Ho-Youn Kwon, pp.141-156,

- Pennsylvania State Univ Press.
- Hurh, Won Moo, 1998, *The Korean Americans*, Greenwood Press.
- Kibria, Nazli., 2003, *Becoming Asian American: Second-Generation Chinese and Korean American Identities*, Johns Hopkins University Press.
- Kim, Dae Young, 2013, *Second-generation Korean Americans: the struggle for full inclusion*. LFB Scholarly Publishing LLC.
- Kim, Kwang Chung and Kim Shin, 2001, “The Ethnic Roles of Korean Immigrant Churches in the United States”, In *Korean Americans and Their Religions: Pilgrims and Missionaries from a Different*, edited by Shore Kwang Chung Kim, R. Stephen Warner and Ho-Youn Kwon, pp.73-94, Pennsylvania State Univ Press.
- Kim, Shore Kwang Chung, Warner, R. Stephen and Kwon, Ho-Youn, 2001, “Korean American Religion in International Perspective”, In *Korean Americans and Their Religions: Pilgrims and Missionaries from a Different*, edited by Shore Kwang Chung Kim, R. Stephen Warner and Ho-Youn Kwon, pp.3-24, Pennsylvania State Univ Press.
- Lee, Stacy J., 2009, *Unraveling the “Model Minority” Stereotype: Listening to Asian American Youth*, Teachers College Press.
- Lew, Jamie, 2006, *Asian Americans in Class: Charting the Achievement Gap Among Korean American Youth*, Teachers College Press.
- Min Pyong Gap and Kim Dae Young, 2005, “Intergenerational transmission of religion and culture”, *Sociology of Religion*, 66(3): 263-282.
- Moon H. Jo, 1999, *Korean immigrants and the challenge of adjustment*, Greenwood Press.
- Park Kye young, 1997, *The Korean American Dream: Immigrants and small business in New York City*, Cornell University Press.
- Pew Research Center, *Pew Research Center analysis of 2010*, American Community Survey.
- Portes, Alejandro, and Robert L. Bach, 1985, *Latin Journey; Cuban and Mexican Immigrants in the United States*, Berkeley; University of California Press.
- Portes, Alejandro, 1995a, “Economic Sociology and the Sociology of Immigration: A Conceptual Overview.” In *The Economic Sociology of Immigration: Essays on Networks, Ethnicity, and Entrepreneurship*, edited by Portes Alejandro, pp.1-41,

- New York, Russell Sage Foundation.
- , 1995b, “Children of Immigrants: Segmented Assimilation and Its Determinants.”
In *The Economic Sociology of Immigration: Essays on Networks, Ethnicity, and Entrepreneurship*, edited by Alejandro Portes, pp.248-79, New York, Russell Sage Foundation.
- Portes, Alejandro, and Rubén G. Rumbaut, 2006, *Immigrant America: A Portrait*, Berkeley; University of California Press.
- Schiller Glick, N and Fouron, G., 2001, *Georges Woke Up Laughing: Long Distance Nationalism and the Search for Home*, Duke University Press.
- Shin, Gi Wook, 2006, *Ethnic Nationalism in Korea: Genealogy, Politics and Legacy*, Stanford University Press.
- Smith, M. P. and Guarnizo, L. E. eds., 1998, *Transnationalism from Below*, New Brunswick: Transaction Publishers.
- U.S. Census Bureau, 2000, <http://www.census.gov/>
- U.S. Census Bureau, 2010, <http://www.census.gov/>
- Vertovec, S., 1999, “Conceiving and Researching Transnationalism”, *Ethnic and Racial Studies*, 22(2), pp.447-62.
- Vertovec, S., 2009, *Transnationalism*, Routledge (バートベック, S., 2014, 『トランスナショナリズム』 水上徹男ほか訳, 日本評論社).
- Wakem, F., 1988, “Transnational and Comparative research”, *Social Science research Council* 42(4), pp.85-89.
- Wu, Ellen D., 2013, *The Color of Success: Asian Americans and the Origins of the Model Minority*, Princeton University Press.
- Yoon, In Jin, 1997, *On My Own: Korean Businesses and Race Relations in America*, Chicago University Press.
- Young Jacob Yongseok, 2012, *Korean, Asian, or American? Identity, ethnicity and autobiography*, Univ Press of Amer.
- Zia, Helen, 2000, *Asian American Dreams: The Emergence of an American People*, Farrar, Straus and Giroux.

韓国語文献

- チョン・ビョンチョル, 2013 「アメリカ移民社会の1世移民者の文化適応過程と教会の役割」
『改革論叢』 27 : 219-258頁

- チャン・ソンミ, 2004 「韓人の自営小企業の実態分析」『韓国東アジア論叢』31巻1号:
185-212頁
- キム・テギほか, 2006 『在米韓国人社会の経済環境』チンムンダン
- イ・グァンギ, 2011 『ニューヨーク韓人社会の現象と教育問題』ブックコリア
- イ・グァンギユ, 1989 『在米韓国人』一潮閣
- イ・ジョン, 2003 「韓国人移民教会の成長とその機能に関する研究」『文化歴史地理』韓国
文化歴史地理学会, 15(1): 31-46頁
- イ・ジョン, 2008 「在米韓国人2世たちの教会活動とアイデンティティの問題」『韓国地域
地理学会誌』14(5): 573-586頁
- ミン・ギョンヒ, 2008 『アメリカ移民の歴史—理論と実態』忠北大学出版社
- ミン・ビョンカプ, 1991 「韓国教会の構造と機能」ミン・ビョンカプほか『アメリカの中
の韓国人』ユリム文化社
- ナ・ヒョンオク, 2004 「在米韓人団体の現況と組織的特性」『韓国東アジア論叢』31巻1号:
359-380頁
- ユン・ソンソク, 2005 『在米韓国人団体の活動と韓人の意識調査』全南大学社会科学研究所
- ユン・インジン, 2004 『コリアンディアスポラ The Korean Diaspora』高麗大学出版社

日本語文献

- 五十嵐武士編, 2000 『アメリカの多民族体制』東京大学出版会
- ウィリアム・ダリティ／南川文理, 2006 「水平移動・人種・アメリカ化」樋口映美／中條
献編『歴史のなかのアメリカ』彩流社
- 高全恵星監修(柏崎千佳子訳), 2007 『ディアスポラとしてのコリアン—北米、東アジア、
中央アジア』新幹社
- 小林富久子, 2011 「コリア系アメリカ文学の流れ」植木照代監修『アジア系アメリカ文学
を学ぶ人のために』世界思想社
- 坪田光平, 2013 「フィリピン系結婚移民とエスニック教会」『社会学年報』42: 97-106頁
- 中野耕太郎, 2006 「祖国ナショナリズムとアメリカ愛国」樋口映美／中條献編『歴史のな
かのアメリカ』彩流社
- 三浦綾希子, 2012 「フィリピン系エスニック教会の教育的役割」『教育社会学研究』90:
191-211頁
- 春木育美, 2015 「バージニア州の韓国系移民者による「東海」併記運動のプロセスと背景」
『移民政策学会』7号, 2015年: 168-183頁

The Korean ethnic church and Korean Immigrants to the United States

HARUKI Ikumi

In the United States, Korean immigrants enthusiastically dedicate and commit themselves to the activities of the Korean ethnic church. The role of the church as a central part of the Korean community has been important since they started to immigrate to the States in the late 1960s.

They go to church not only for religious purposes but also for seeking the unity to accommodate themselves to American life and secure social resources.

The majority of Korean immigrants to the States are Christians and depend deeply on the ethnic church since it provides them with a wide range of services and social resources and serves a variety of social functions, which other Korean organizations in the States cannot. These functions and the characteristics of Korean immigrants are inseparable, which, in turn, enable the church to function.

However, the second-generation immigrants, who are born in the States, speak English as a native language and receive American higher education, find less need for the church to provide them with such functions as mentioned above.

The future and transformation of the Korean ethnic church is noteworthy as the second-generation immigrants will have children, and the number of the second and third generations of immigrants will eventually exceed that of the first.